



TITLE:

きらめく動物たちの命と海:久保田
信の白浜だより(その7)

AUTHOR(S):

久保田, 信

CITATION:

久保田, 信. きらめく動物たちの命と海:久保田信の白浜だより(その7).
うみひろも 2011, 81: 24-25

ISSUE DATE:

2011-06-16

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/180229>

RIGHT:

© 海の生き物を守る会

4. きらめく動物たちの命と海 【久保田信の白浜だより(その7)】

ウミガメの未来

2003年12月24日、北浜でアカウミガメの幼若個体が漂着しているのを見つけた。死因は漁網にかかったために窒息したと推測された。網の切れ端が証拠として残っていた。腐敗状況から、死んで数日経っているとみられる。産卵地が近いこともあって、実験所周辺にはアオウミガメよりもアカウミガメの方が多く訪れる。まれに、鼈甲で知られるタイマイも現れており、北浜でも甲羅の一部らしきものを拾ったことがある。

(1) ウミガメの産卵と孵化

砂浜を歩いていると漂着個体ばかりでなく、ほほえましい光景に出くわすこともある。2003年8月下旬にアカウミガメの卵をじかに見ることができた。これは、1992年の産卵時の遭遇に続く2度目の対面だった。瀬戸臨海実験所での児童館の自然観察会で、北浜で砂の表面に出ていた数個の卵を発見した。7月初旬に田名瀬英朋さんがはい跡を発見した地点と一致した。通常2カ月でウミガメ類の卵はふ化するので、すぐに掘り出すのは止めて、完全に孵化し終わった時点を見計らって、いろいろ調べることにした。

9月中旬、瀬戸臨海実験所に全国から多くの大学生がやって来た。実習のスケジュールには入ってなかったが、ウミガメの孵化直後の時期とちょうど重なったので、学生たちに孵化の確認をと穴掘りをして見てもらった。驚いたことに、50cmという予想よりも浅い所に卵があった。波浪などで地形が変わりやすい北浜の砂浜だから、幾つかの卵が表面まで放り出されたのも納得できる。卵は全部で100個余りあった。その6割ほどが孵化に成功していた。残りは黒ずんだ塊と化して死んでいた。紀伊民報記者が学生たちにインタビューした。ウミガメの卵について、「陸に上がって深く穴を掘って産卵するので、硬い殻と思っていた。こんなに軟らかいとは思わなかった」と驚いていた。

(2) ウミガメの未来は暗い

自然界は厳しく、ウミガメを取り巻く環境はどんどん悪くなる一方だ。このような状況の中で、生まれ故郷のここ北浜に戻って産卵できるのは、ほとんど奇跡に近いだろう。瀬戸臨海実験所に勤務する地元出身の職員や古くから白浜町で暮らしている方々から、今回の北浜での卵掘りの新聞記事を読んで、「昔は、このあたりでウミガメ類の産卵がよく見られたものだ」との知らせがあった。白浜町でもウミガメ類の産卵は、昔話になりつつあるようで残念だ。

一方、ごく最近、ウミガメ特有の奇病「フィブロパピロマ」の慢延が懸念されている

という報道もあった。ますます気がかりだ。南部町の千里の浜では、最も多い時に上陸 900 回（1990 年）、産卵 348 回（1991 年）の記録もあり、『ウミガメ銀座』状態だったが、近年は減少の一途をたどり、2003 年は上陸 155 回、産卵 75 回となっているという。産卵に適した砂浜の減少に加え、近年、漁網や漁獲法などがすこぶる発達したことから、混獲（誤って漁網にかかってしまうこと）によって相当数のウミガメが犠牲になっていることが想像できる。希少動物であるウミガメを、子々孫々まで残すのは、我々の義務だ。

ところで、米国のデューク大学の研究グループは、このほど、世界中で年間 30 万個体ものウミガメ類が、誤って漁網にかかったり、マグロはえ縄にかかったりして混獲されているとの試算を出した。同グループは、アカウミガメやオサガメが、過去 20 年間で 80～

90%も減少したことを指摘している。混獲後の死亡率は不明確だが、アカウミガメは、太平洋だけでも年間数万個体が死んでいると見積られている。ウミガメ類の未来は暗すぎる。

（2004 年 3 月 30 日）



図. 和歌山県白浜町のアカウミガメ